



第 22 回

全国棚田 千枚田 サミット

報告書(概略版)



棚田には夢がある！

～棚田の価値を知り・活かし・継承するために～

開催日：平成 28 年 7 月 14 (木) ～15 日 (金)

開催地：新潟県 佐渡市

目 次

1	全体概要	
(1)	日程	1
(2)	場所	1
(3)	テーマ	1
(4)	参加者	1
2	プログラム及び実施詳細	
	【7月14日】	
(1)	オープニング	2
(2)	開会式	2
(3)	事例発表	2
(4)	基調講演	2
(5)	分科会	2
(6)	全体交流会	6
	【7月15日】	
(1)	現地視察	7
(2)	分科会まとめ	7
(3)	閉会式	7
3	交流プログラム（オプションプログラム）	7
4	共同宣言	8
5	報告写真	9

第 22 回全国棚田（千枚田）サミット 報告書

1 全体概要

- (1) 日程 平成 28 年 7 月 14 日（木）～16 日（土）
- (2) 場所 アミューズメント佐渡 [メイン会場] (新潟県佐渡市中原 234-1)
 サンテラ佐渡スーパーアリーナ [第 2 分科会、昼食、全体交流会 会場]
 (新潟県佐渡市窪田 75-1)
 佐渡中央会館 [首長会議 会場] (新潟県佐渡市河原田本町 394)
- (3) テーマ 「棚田には夢がある！～棚田の価値を知り・活かし・継承するために～」
- (4) 参加者 700 名

内容	参加者	(島外)	(島内)
基調講演	700	513	187
分科会	637	488	149
第 1 分科会	240	163	77
第 2 分科会	158	114	44
第 3 分科会	142	122	20
棚田のまもりびとミーティング	28	26	2
首長会議	31	31	0
U30 棚田サミット	38	32	6
全体交流会	500	450	50
棚田現地視察	455	412	43
①岩首棚田コース	80	78	2
②北片辺棚田コース	83	75	8
③小倉千枚田コース	103	92	11
④バスで巡る佐渡の里山里海コース	189	167	22
交流プログラム	86	84	2
A：相川中学校ガイドと佐渡金山近代化遺産	12	11	1
B：尖閣湾見学と民話語り	26	26	0
C：行谷小学校トキガイドとトキ野生復帰	29	28	1
F：名物！漁師町姫津のイカイカ祭り見学	16	16	0
G：高千中学校文弥人形と天然杉ハイキング	3	3	0

2 プログラム及び実施詳細

【7月14日】

(1) オープニング（13：30～14：00）

- ①新潟県立羽茂高等学校 郷土芸能部 芸能発表
- ②佐渡市立金井小学校5・6年生 合唱
「おそすぎないうちに」

(2) 開会式（14：00～14：30）

①主催者の挨拶

- ・全国棚田（千枚田）連絡協議会 会長（佐賀県玄海町長 岸本 英雄）挨拶
- ・第22回全国棚田（千枚田）サミット佐渡市実行委員会 会長（新潟県佐渡市長 三浦 基裕）挨拶

②開催地歓迎の挨拶：新潟県副知事 寺田 吉道 氏

③来賓祝辞

- ・自由民主党 衆議院議員 細田 健一 氏
- ・民進党 衆議院議員 鷲尾 英一郎 氏
- ・北陸農政局 局長 小林 厚司 氏
- ・東京大学サステイナビリティ学連携研究機構長 武内 和彦 氏

(3) 事例発表（14：30～14：50）

テーマ：「世界農業遺産を通じて考える島の成り立ちとこれから」

発表者：新潟県立佐渡総合高等学校

新潟県立佐渡総合高校の4名により、「世界農業遺産（GIAHS）」に認定されている佐渡の紹介とその将来像について発表が行われた。トキと寄り添ってきた佐渡の農業や棚田があるからこそ、佐渡の伝統芸能も生まれ、受け継がれてきた。その過程で地域がつくられ、本当の豊かさがここにあるのだ、と過去・今・未来を通じたメッセージのこもった発表が行われた。

(4) 基調講演（14：50～15：50）

テーマ：「日本を変える里山のチカラ」

講師：(株)日本総合研究所 主席研究員 藻谷 浩介 氏

日本の人口の年代別構成をグラフで分かりやすく表し、時代の変容を鮮やかに見せつつ、都市（東京）と佐渡市などの小さな自治体の未来予想を示した。未来があるのは、油をジャバジャバ使う都市ではなく、里山が持つチカラ、そして、ローカルなものを大事にする生き方だと説いた。

(5) 分科会（16：30～18：00）

6つの分科会に分かれ、会場参加型のパネルディスカッション等を行い、それぞれ議論を深めた。

①第1分科会

テーマ：「棚田には米がある！～棚田の米を活かせば、たくさんの夢が広がる～」

座長：板垣 徹氏（(株)JAファーム佐渡 代表取締役社長）

コメンテーター：齋藤 真一郎氏（佐渡トキの田んぼを守る会）

パネリスト

- ・金子 真人氏（(株)金子商店 専務取締役）
- ・坂本 孝明氏（農事組合法人 達者農産）
- ・山本 亮氏（輪島市 地域おこし協力隊）
- ・西山 京子氏（料理研究家）

棚田米は、その苦労に見合うだけの価値があるのか、それはどんな価値なのか、その価値は、米を食べる側である消費者に果たしてつながっているのか、また、どう伝えるのがいいのか、というのが第1分科会の課題だった。

米穀店を営みお米マイスターとして活躍の金子真人氏、料理研究家で人気ブロガーの西山京子氏、能登の里山で地域おこし協力隊員として活躍する山本亮氏、地元佐渡の海岸地帯で生産組織を立ち上げた坂本孝明氏という多彩なパネリストの皆さんに語っていただき、コメンテーターとして佐渡トキの田んぼを守る会代表の齋藤真一郎氏には、ご自分の実践を踏まえて議論の整理をお願いした。フロアからも、オーナー制度の現状など積極的に発言いただき、地元JAからは棚田米販売について報告いただいた。

伝統文化と環境福祉の専門学校の本間慎氏からは、「単に棚田米だというだけで売れるわけではない。高値で売れるおいしい棚田米なら、収量が少なくても、経営的に成り立つ。よって、棚田米の食味を向上させる研究は進んでいるが、大切なのは、その地域に合った美味しいお米づくりの研究を地域の大学等の研究機関と協力して進めることが重要だ」という意見を頂いた。

それらの論議を通して確認したことは、次のようなことであった。

①棚田の風景や棚田米には、今日の日本社会にとって失ってはならないかけがえのない価値があること、②その価値を消費者に伝えるために積極的な情報発信が必要であること、特にネットで、動画も含めて、生き生きとした情報を継続的に発信し続けることが効果的であること、リーフレットはきちんと更新すること③消費者、特に子どもに来てもらい、現場に立って風景を見てもらうことでファンをつくる取り組みが重要であること、④棚田支援の強力なツールであるオーナー制度を含めて、消費者との結びつきを強めること、⑤プロ農業者として、食味・品質の確保は大事。棚田米は文句なくおいしいのだが、その条件をきちんと管理すること。リピーターを獲得するには、「棚田」だけではなく、「うまい」も必要なのだ。

このような、棚田米のリピーターが棚田の風景を支える仕組みを、各地で構築していくことを確認した分科会であった。

②第2分科会

テーマ：「棚田には命がある！～棚田が支える命と共生し活かせば、たくさんの夢が広がる～」

座長：豊田 光世氏（新潟大学 研究推進機構 朱鷺・自然再生学研究センター 准教授）

コメンテーター：佐々木 邦基氏（(一社)佐渡生きもの語り研究所 副理事長）

パネリスト

- ・中村 浩二氏（金沢大学 名誉教授、里山里海プロジェクト 代表）
- ・本間 太郎氏（海利用研究会、農家、漁業者）

- ・竹田 和夫 氏（新潟県立新発田高等学校 教諭、棚田学会 理事）
- ・大野 広幸 氏（社会福祉法人 未来保育会 理事長、ふじみ保育園 園長）

「命」というテーマを掲げていた第2分科会では、子どもから大人まで、棚田を舞台に人びとが成長し生きることについて、4名のパネリストとともに考えた。子どもたちに「お米は美味しい」という原体験をもって欲しいという大野広幸氏は、栄養士や職員も巻き込みながら、棚田の価値を体感する機会を作っている。竹田和夫氏は、大学生の教育を通して、棚田地域の発展の手がかりを考える。多様な専攻の大学生とともに、棚田を生かす方法をさまざまな視点から提案し、現場に赴いて可能性を検討する。

棚田の保全是、国外でも大きなチャレンジだ。中村浩二氏は、能登地域で展開した里山マイスター養成の経験を生かして、フィリピン・イフガオの棚田地域で人材育成に取り組む。地域の人びとが自ら目標を立てることを支えていくことが重要だという。

棚田での耕作は、容易ではない。だからこそ、目的意識が必要であるし、何かを達成した時の喜びも大きい。本間太郎氏は「百姓は目標をもって挑戦し続ける存在だ」と語る。夢をもち、挑戦し続ける、そんな背中を見て欲しいと話す。食の安全性への徹底的なこだわりのもと、米作りに夢中になって取り組む姿は、人びとの共感を呼び起こすに違いない。棚田で描く夢を通して、人びとがつながることができたら、きっと大きな可能性が生まれるだろう。

③第3分科会

テーマ：「棚田には^{ぬくもり}がある！～棚田の^{ぬくもり}を活かせば、たくさんの夢が広がる～」

座長：森山 明能 氏（株）御祓川 シニアコーディネーター

コメンテーター：南雲 純子氏（元佐渡市観光戦略官）

パネリスト

- ・多田 寛子 氏（春蘭の里、農家民宿春蘭の宿 女将）
- ・連河 健仁 氏（NPO 法人 DREAM ISLAND 副理事長）
- ・齋藤 倫子 氏（岩首集落在住者）
- ・千田 倫子 氏（鼓童文化財団、NPO 法人 佐渡芸能伝承機構 副理事長）

第3分科会では、棚田の米でも生物多様性でもない「第3の価値」に焦点を当てた。最終的にサミット共同宣言の一文として、「私たちは、過去から受け継いできた棚田地域の環境とコミュニティを次世代につなぐため、外部との交流を通じて、自分たちが誇りと楽しみを持てる地域資源の発掘・発信に努めます」という内容をまとめるに至った。今後棚田地域で意識すべき①目的、②方法論、③努力行動指針を示したわけだが、この一文に至るまでの議論を少し紹介したい。

まず、どんな地域にも資源はある。ましてや棚田には豊富にある。問題は資源を、活用できる資源＝地域資源に変えていけるかだ。地域資源として発掘するためには、外部との交流を積極的に図り、それ自体を楽しみとしながら継続していくことが重要であるとされた。

さらに、その外部交流のプロセスの中で、「文化的誇り」や「楽しさ」が棚田地域の子供達に伝えられていることも報告された。棚田地域の環境資本と社会関係資本（コミュニティ）を次の時代につなげるきっかけも外部交流に起因することを示唆している。勿論その際、経済的な資本も必要であるが、先ずはしっかり地域の「光」を育むこと。それがしっかりできれば「光を観に来る」という本来的な地域へ

の「観光」も活発化していき、経済的資本も蓄積されるという議論であった。

最後に、今回の分科会の本質は齋藤倫子氏が指摘してくれ気がしている。彼女は自分が幼い頃、棚田は遊び場で家族と友達のいる楽しい場所だったと言う。だからこそ、その楽しさを自分の子供たちにも感じてもらい故郷・岩首を好きになってもらいたい、と。

この「楽しいから好きになる」という単純な一言にこそ、地域づくりの大事な部分が集約されていると感じた。「楽しいから好きになる」が時間（世代）と空間（集落内だけでなく外部の人も）を超えて行く時、本物の光がそこに生まれ、棚田の第3の価値が最大化すると思うからである。

④棚田のまもりびとミーティング

座長：中島 峰広 氏（NPO 法人 棚田ネットワーク 代表）

恒例となった保存会の意見交換会は、本年度まもりびとミーティングの名で開催された。今回は、東日本（東北・関東・信越・東海）を中心にした保存会 28 団体に呼び掛け 17 団体の参加を得た。これを棚田オーナー制の実施状況や地域的バランスなどを考慮し A、B、C の 3 つのグループに分け議論を進めることにした。

まず、グループでの議論を進める前に、各組から NPO 法人である 1 団体を選び話題提供をしてもらうことにした。A 組の新潟県十日町市地域おこし実行委員会からは絶滅集落になるのは時間の問題といわれた池谷集落が国際 NPO の JEN との交流、地域おこし協力隊員や新しい I ターン者の定着などにより奇跡の集落といわれるほどに変貌を遂げたこと。B 組の岐阜県恵那市坂折棚田保存会からは棚田オーナー制を基盤とした取り組みを発展させ、取り組みの多様化と事業化を目指していること。C 組の奈良県明日香の未来を創る会からは、高知県禰原町に次ぐ歴史を持つ棚田オーナー制がマンネリ化して沈滞したため、活動の範囲を飛鳥川流域全体に広げ新たな活動を模索していることなどが報告された。

その後のグループでの議論では、A 組が組織におけるリーダーの育成、運営資金の獲得方法、棚田米販売については安定的な販売先の確保、ブランドの確立、小口にするなど販売方法の工夫の必要性などが論じられた。B 組では、取り組みの担い手としては若者よりも退職後のシニア世代をターゲットにするのが有効的であること、取り組みではボランティア活動から脱却し、事業化が必要なことが論じられた。C 組では、保存活動を広域化し支える人を集め易くすること、担い手の労力として石川県輪島市白米での北陸地区国公立大学 8 校、静岡県菊川市せんがまちでの静岡大学棚田同好会などの活動にみられるような学生の作業参加がきわめて有効的であることなどが議論された。

⑤首長会議

座長：千賀 裕太郎 氏（東京農工大学 名誉教授、棚田学会 会長）

首長会議は、農林水産省地域振興課の島田篤行課長補佐、中村弘志係長のご臨席を得て、1 県・16 市町村の首長らから「外貨獲得に向けた取り組み・ルールづくり」、「学校教育を通じた人材育成」の 2 テーマに関する報告を受け、質疑が活発に行われた。

「外資獲得」に関する報告からは、棚田等の里山景観や棚田米を始めとした身近な安全・安心の農作物に好意を持ち、「お金を払ってでも棚田地域を支援したい」と「オーナー」制度や「棚田バンク」制度に積極的に参加する都市民の増加がうかがわれ、大地の芸術祭、案山子コンテスト、地元酒造会社と組ん

で「廃校」で酒造を行う例、韓国からの来訪者と高校生が田植交流を楽しむ例など、参加者からの興味深い「外貨獲得」に向けた事例報告が相次いだ。

また、棚田地域で高齢化が進行するなか「学校教育を通じた人材育成」の取り組みも進んでおり、小学校内で児童が米の栽培をしている例、小学校児童の農業高校生の指導による棚田での体験学習、JA主催による「こども農学校」での体験学習、などが紹介された。とりわけ、保育園児など早い段階からの農業体験は、地域への愛着と農業への理解を深めるうえで、とても大切、との意見が共感を集めた。

⑥U30（アンダーサーティ）棚田サミット

テーマ：棚田の未来を具体化する ～夢のある企画を考え実行しよう！～

座長：高桑 智雄氏（NPO法人 棚田ネットワーク 事務局長）

コメンテーター：藻谷 浩介氏（(株)日本総合研究所 主席研究員）

棚田サミット22回の歴史の中で、初めての若手部会として開催された「U30（アンダーサーティ）棚田サミット」は、主催者である佐渡の棚田関係者の「棚田の未来を語る上で若者が集まるサミットにしたい」という思いが実現したものであった。

名称は「U30」だが、20歳～40歳くらいまでの全国の若手農家、地域おこし協力隊の棚田班、自治体担当者、保全団体のメンバーなどが対象で、全員参加型の討論会で「棚田の夢を語り合いたい」というコンセプトで募集を開始し、事前に30名程度の申し込みがあった。若手の会議らしくあらかじめFacebook上でグループを作り、自己紹介と「棚田がこんな場所であってもいいと思う」をテーマに提案を書き込んでももらい、当日の討論の時間を有効に使うための工夫なども試みた。

当日は、さらに参加者や見学者が増え、会場は満員。基調講演を終えたばかりの藻谷浩介氏もコメンテーターとして駆けつけ、賑やかな雰囲気の中スタートした。Facebook上で貰ったさまざまな意見をもとに座長が「日常の場」「学びの場」「イベント交流の場」という3つのカテゴリーを提案し、参加者にマッピングしてもらいながら、若者が棚田で活動する上で、地域の特性を踏まえた3つのバランスが大切であるとの結論を導き出し、共同宣言に提案することを合意した。

すべてが初めての試みで課題もたくさん残ったが、棚田の未来を盛り上げて行く上では画期的な出来事となったのではないかと。形や名称が変わっても、棚田に関わる若者が集まってつながれる場が、次のサミットにも引き継がれることを切に願う。

（6）全体交流会（18：30～20：30）

佐渡の棚田米や地元の食材を活用した郷土料理や地酒などをふるまい、講師、座長らをはじめ、参加者相互の交流を更に深めた。また、佐渡伝統芸能によるおもてなしや、特産品抽選会を実施した。

①伝統芸能の披露

- ・なぎさ会による佐渡おけさ等
- ・春日鬼組による潟上型鬼太鼓
- ・小倉物部神社若者による前浜型鬼太鼓

②特産品抽選会

佐賀県玄海町、長崎県波佐見町、新潟県佐渡市

【7月15日】

(1) 現地視察(8:30~12:00)

佐渡の各地域の特徴ある棚田を地域住民が案内し、棚田の歴史や地域の取り組みを紹介した。また、地元で生産される米のおにぎりと、佐渡の番茶等の試食を提供した。

- ①岩首棚田コース
- ②北片辺棚田コース
- ③小倉千枚田コース
- ④バスで巡る佐渡の里山里海コース

(2) 分科会まとめ(13:00~13:30)

第1分科会、第2分科会、第3分科会、棚田のまもりびとミーティング、首長会議、U30棚田サミットの計6つの分科会の総括を各座長が報告するとともに共同宣言を取りまとめた。

(3) 閉会式(13:30~14:00)

①第22回全国棚田(千枚田)サミット共同宣言の採択

(佐渡市地域おこし協力隊 岩崎 貴大・近藤 千扇、輪島市地域おこし協力隊 山本 亮 氏)

②次期開催地の挨拶(長崎県波佐見町長 一瀬 政太)

③閉会の挨拶(新潟県佐渡市 副市長 伊藤 光)

④閉会宣言(第22回全国棚田(千枚田)サミット佐渡市実行委員会 副会長 大石 惣一郎)

3 交流プログラム(オプションプログラム)

参加者が佐渡の子どもたちとの交流や伝統芸能などを通して佐渡の魅力を体験できる交流プログラムを実施した。

【7月15日】(14:30~17:30)

A: 相川中学校ガイドと佐渡金山近代化遺産

B: 尖閣湾見学と民話語り

C: 行谷小学校トキガイドとトキ野生復帰

G: 高千中学校文弥人形と天然杉ハイキング(15~16日の2日間で開催)

【7月16日】(9:00~15:00)

F: 名物! 漁師町姫津のイカイカ祭り見学

G: 高千中学校文弥人形と天然杉ハイキング(15~16日の2日間で開催)

第22回全国棚田（千枚田）サミット 共同宣言

私たち全国の農産物生産者、消費者、棚田保全団体、行政職員など、さまざまな立場から棚田に関わる人々は、今回、新潟県佐渡市に集い、第22回全国棚田（千枚田）サミットを開催しました。

棚田は、先人たちが多大な労力と長い年月をかけて築き上げてきた、農業的・環境的・文化的な価値を持つ、私たちのかけがえのない財産です。しかし、高齢化、農業の担い手不足などにより、全国の棚田は危機的な状況に直面しています。

そこで、今回のサミットでは、棚田の魅力や可能性を再発見し、夢を持ってどう未来に継承していくか、議論を深めました。

ここに、私たちの議論の成果を共同で宣言します。

1. 私たちは、かけがえのない里山の農業を支えるため、棚田米の価値を消費者と共有し、交流活動を積極的に進めます。
2. 私たちは、豊かな命をはぐくむ里山を舞台に食と農の原体験の機会をつくり、棚田の多様な可能性と夢を追求しながら、果敢に挑戦し続ける姿勢を通して、「共感」と「協働」のスパイラルを生み出します。
3. 私たちは、過去から受け継いできた棚田地域の環境とコミュニティを次世代につなぐため、外部との交流を通じて、自分たちが誇りと楽しみを持てる地域資源の発掘・発信に努めます。
4. 私たちは、棚田保全活動を持続的に続けていくため、取組みの事業化を行い、新たな地域資源を発見・創造することにより、内外から担い手が集まるような仕組み作りに取り組みます。
5. 私たちは、棚田が発信する自然共生社会という価値観を世の中に広め、地域外からの“外貨”獲得に向けた仕組みづくりや、学校教育を通じた人材育成に積極的に取り組みます。
6. 私たち棚田の未来を担う若手は、棚田を「日常」「学び」「イベント交流」の3つの場と捉え、地域の特性にあった3つのバランスを考えながら、自らの考えた「棚田の未来予想図」の実現に取り組みます。

平成28年7月15日

第22回全国棚田（千枚田）サミット 参加者一同

■会場状況



メイン会場（アミューズメント佐渡）正面



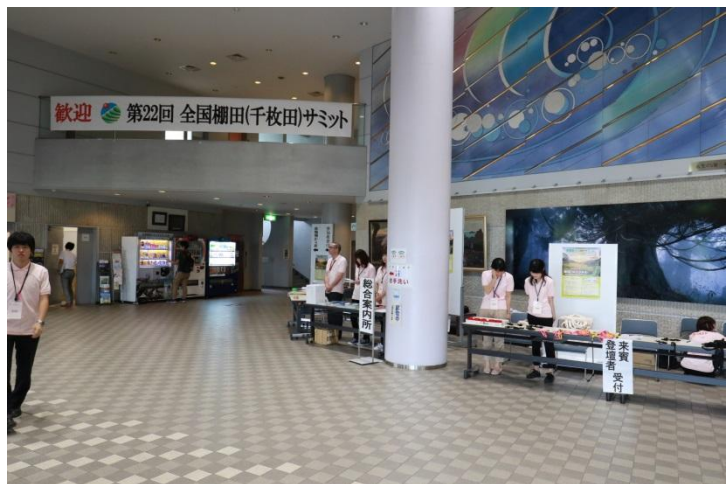
アミューズメント佐渡 大ホール



展示スペース



展示スペース



エントランス



バス乗り場

■オープニングセレモニー・開会式



新潟県立羽茂高等学校 郷土芸能部 芸能発表



佐渡市立金井小学校 5・6年生 合唱



全国棚田（千枚田）連絡協議会
会長（玄海町長）挨拶



全国棚田（千枚田）連絡協議会
副会長（佐渡市長）挨拶



開催地歓迎の挨拶 新潟県副知事



来賓

■ 基調講演・事例発表



基調講演 講師

(株)日本総合研究所 主席研究員 藻谷浩介 氏



基調講演



基調講演



事例発表 新潟県立佐渡総合高等学校

■ 分科会



第1分科会



第2分科会



第3分科会



棚田のまもりびとミーティング



首長会議



U30棚田サミット

■ 全体交流会



■ 棚田現地視察



岩首棚田コース



北片辺棚田コース



小倉千枚田コース



バスで巡る佐渡の里山里海コース

■分科会まとめ



座長による分科会のまとめの発表

■閉会式



共同宣言の採択



次回開催地（長崎県波佐見町）の挨拶

■交流プログラム



A : 相川中学校ガイドと佐渡金山近代化遺産



B : 尖閣湾見学と民話語り



C : 行谷小学校トキガイドとトキ野生復帰



F : 名物！漁師町姫津のイカイカ祭り見学



G : 高千中学校文弥人形と天然杉ハイキング